

生きづらい日本人

私たち日本人は「令和時代」を迎えました。

昭和時代の日本は、のぼり坂を駆け上がるような日本でした。その次の平成時代は字のとおり、平らだった……、成長はしなかつたけれど、昭和時代の蓄えがあつたので、平穏な社会ではあつた。では、令和時代は……？ 過去の蓄えも食い尽くして、くだり坂に入る……？

新しい元号の時代に入った令和元年に、そんな不安をよぎらせる出来事がいくつかありました。

その1つが、「老後2000万円赤字問題」です。

これは金融庁の報告書で、夫が65歳、妻が60歳の時点で夫婦ともに無職で、30年後（夫95歳、妻90歳）まで夫婦ともに健在ですと、毎月55000円、家計は赤字になって、老後30年間で2000万円のお金が不足するとされたものです。

日本人は長寿化しています。1950年ごろの男性の平均寿命は約60歳でしたが、現在は約81歳まで伸びています。現在60歳の人の約4分の1が95歳まで生きるといふ試算もあるようです。

でも、長生きするとお金が足りない!?

今日本では、若者の最大の関心事は、なんと、老後のこと。そう聞いたので、本当なのかと若い人たちに尋ねてみると、確かに、そのことを否定する若者はあまりいません。

私は還暦ぐらいの年齢ですが、私と同じ世代の方々が若いころは、老後のことなどあまり考えなかったように思います。がんばれば、老後などなんとかなる。漠然とそう思いながら、目先の楽しいことや仕事のことのほうに関心が奪われていました。

私たち日本人は、いつの間にか、老後の不安に覆われる国民になってしまったようです。

この老後の経済問題の他に、最近の世相をあらわす現象として、もう一つ、令和元年の7月に行われた参議院議員選挙に私は注目しています。それは、山本太郎さんが率いる「れいわ新選組」が予想を上回る支持を国民から受けた選挙でした。

なぜ受けたのが重要です。この世の中は「生きづらい」、そんな思いを募らせる大衆に向かって、それはあなたのせいではない、自分が悪いのではない、政治がすべきことをしてこなかったからだ、生きていてよかったと思える社会を……。

この言葉が多く国民の心に響き、たった2カ月あまりの間に2億円もの草の根からの寄付が集まり（最終的に4億円超）、れいわ新選組は、ほとんどのメディアが無視するなかで228万票もの票を獲得して、全国区で2人の当選者を出しました。

私は政策的な立場が違いますので、現在のれいわ新選組を支持しているわけでは決してありません。大事なことは、それだけ心が疲れている国民が日本には多いということです。これにどう応えるかが、政治の重要な課題になっているのは間違いないでしょう。

そもそも日本は、多くの国民に先進国にふさわしい幸せな人生が約束されている国なのでしょいか。引きこもり、老人の孤独死、簡単には入れない施設、子どもを産みたくても産めない低賃金、若者に蔓延するうつ病、児童虐待や凄惨な殺人事件……。

日本は若年層の自殺率では世界でトップクラス、しかも、15歳から39歳の死因の第1位が自殺です。事故死よりも自殺が多い国は日本だけだといわれます。若い女性のうつ病患者はかなりの割合のようであり、高齢者も、認知症患者は近いうちに700万人にもぼるそうですが、世界の認知症患者の約1割が日本人ともいわれます。かなり深刻です。

最近、国民の多くが閉塞感を覚える現象は、挙げ出したらキリがありません。令和時代を迎えた日本は、どうも、夢も希望も持てない人が大半という国になっているようです。

とくにお子さんを持つ多くの方々は、自分自身のことだけでなく、わが子は将来、本当に幸せな人生を歩めるのだろうかとか心配しているのではないのでしょうか。日本の未来が心配だから、子どもを産む気になれないとおっしゃる方々も、結構いらつしやいます。

私は、この本で、今のこんな社会から脱皮して、もつと楽しい人生へとブレイクスルーするにはどうすればよいかを考えてみたいと思います。

答えは意外と簡単です。それは、ひとりひとりが自分の本当の幸せとはなんなのかを自分自身で考える人生を築くことです。なぜなら、人間はなんのために生まれてきたのかといえば、それは幸せになるためだからです。

自分の幸せを追い求めるといって、何か利己主義の生き方を思い浮かべる方がいらつしやるかもしれませんが、そうではありません。他の人を幸せにすること、その幸せを共有し合うことほど、大きな幸せはないからです。

自分の幸せとは何かを考え、自分が納得する幸せをみつける。人々のその営みをサポートするのが家族であり、社会であり、自治体や国家なのだと思います。

教育もそうです。自分の幸せを自らみつけることができる大人へと育てることは、教育の場でも、日常のお子様との接触や子育てにおいても、重要なテーマです。「子は親の鏡」といわれます。教育で親として大事なものは、まず、自分自身が自らの幸せをみつける人生を歩むことです。子どもはそこから、自分の生き方を自然と身に着けるでしょう。

ただ、幸せになるといつても、前にもみたように、とくに今の日本では、それは決して現実には容易なことではありません。でも、幸せになろうとしなければ、「生きづらい」思いで息のつまったような人生が続くだけです。たった1回の人生、それではもったいない、せめて楽しもうではありませんか。

私はこの本で、そのうえで少しでも参考になればと思うことを、お伝えしてみたいと思います。